

平成23年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市内にある遺跡の現状 その6

文化財ニュース第251号では霞川右岸上流部にある遺跡についてご案内をいたしました。今回はその続きといたしまして右岸下流部を辿り、埼玉県境までをご案内することといたします。

多摩川と霞川での環境の大きな違いから生まれた地形や地質、断層、それからそこに立地する遺跡の分布状態の違いなどについて前回において述べましたが、今回も同じ環境の下、土器や石器が発見された地域についてご案内いたします。

図中①は今寺の報恩寺境域です。ここの地形は、西側を南北に霞川本流が流れ、ちょうど舌状に張り出した台地となっています。本堂の東側は墓地となっており、北側の空き地には回遊となる参道が新規に作られています。公の発掘調査は行われていませんが、北側地域では以前から、縄文時代中期の土器片や石器、奈良・平安時代の土師器、須恵器などが見つかっており、現在でも土器のかけらなどを拾うことができます。

図中②は今寺一里塚榎の北東地域に位置しています。手入れの整った畑は、石一つ落ちていない状態で、現在は表土の範囲で作付する盆栽の苗などが植えられています。住宅の間にもいくらかの畑は存在しますが、表面採集での遺物の収集は難しい状況となっています。

この遺跡では、まだ住宅が少なかった昭和47年ごろ、表面採集により縄文時代中期後半の土器が発見されています。榎から300mほどバス通りを東に行くと地形は一段下がり、この遺跡の地形は広い台地になっていることがわかります。

図中③は藤橋城城の腰遺跡で、中世の城郭「藤橋城」跡を含む、広範囲にわたる遺跡です。北側では、現在の霞川が流れる面からほぼ3メートル高台に位置し、城郭としての遺跡と縄文時代の遺跡との両方が存在する場所となっています。図の南方では縄文時中期後

半の土器や後期前半の土器、平安時代の土師器や須恵器なども見つっています。昭和46年には住宅建築に伴い住居跡が発見されたため緊急調査を行い、竪穴の上部が削られ、浅くなってしまった、一辺が2.6m四方の竪穴住居跡が発掘されました。これは、弥生時代末期の住居跡と確認され、炉跡のほか、ほぼ完形の甕形土器や、台付甕形土器の口縁部などが見つっています。また、平成9年3月には宅地開発事業に伴う遺跡確認調査が行われ、古墳時代前期の住居跡7軒、溝、土坑などとともに大量の土器類が発掘されました。

一方、中世の城郭である藤橋城は昭和28年11月、市の史跡に指定され、昭和44年には学習院大学の学生により部分的な発掘調査が行われました。

発掘された遺物や濠の断面図の形から13世紀後半から14世紀前半と推測され、瀬戸などの陶磁器からの年代では15世紀の特徴を表わしているものとされています。

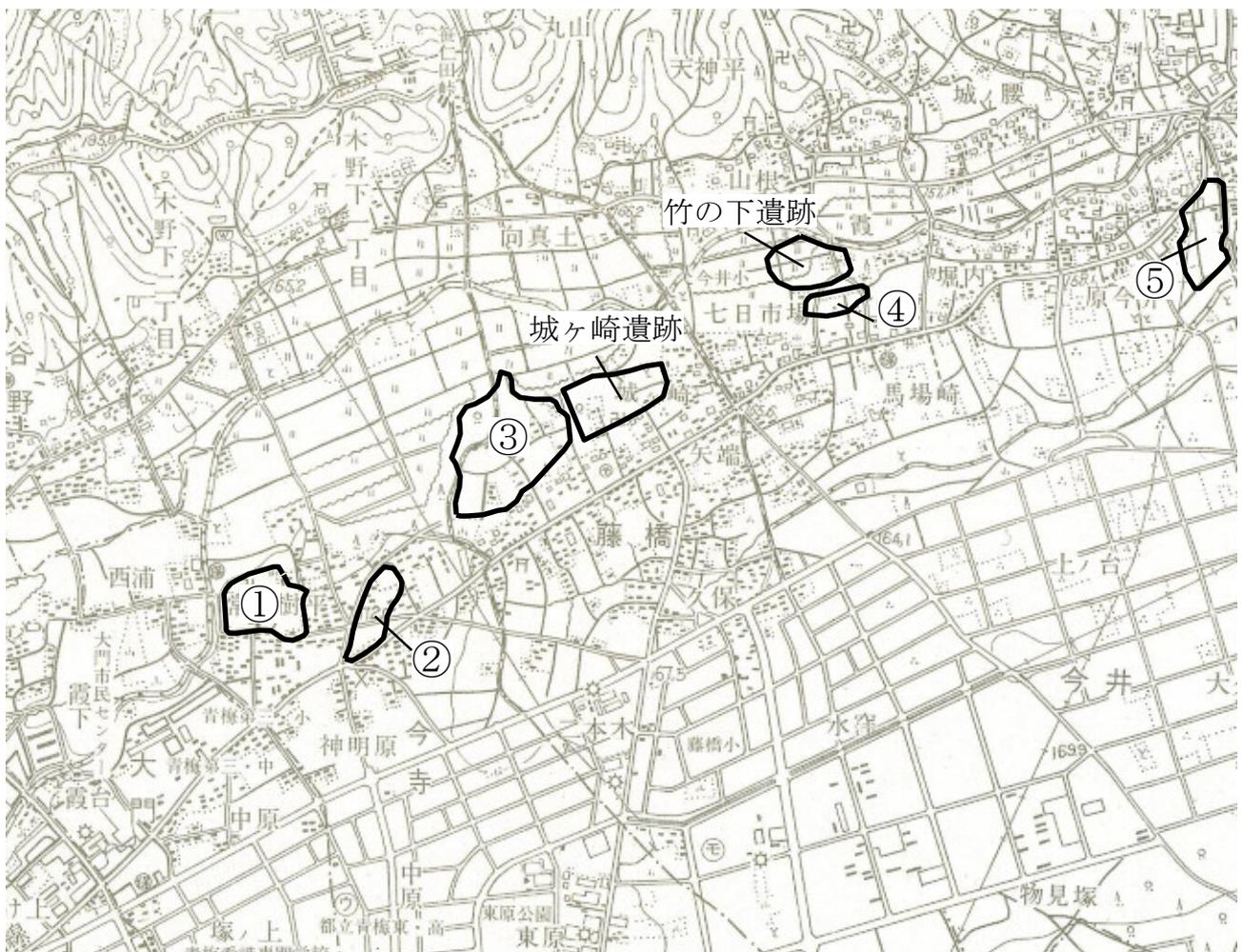
具体的な遺構の確認では、城域の南側で土橋や濠の跡、門址であろうとされる、210cmの間隔で掘られた、ほぼ同じ大きさの柱穴2か所、建築物の存在を示す、深さ60～70cmほどの柱穴が等間隔で20か所ほど並んだ遺構などが発見されています。遺物は、陶磁器のかけらで、瀬戸（碗、小皿、卸皿、高炉皿）、常滑（捏ね鉢、手焙り）、かわらけ4片、鉄釘などが発見されています。この発掘調査の際には、城跡の下層から古墳時代の住居跡が確認され、それに伴うかまどの構築物が土橋の部分に差し掛かっていることも確認されています。

図中④は今井馬場遺跡です。今井市民センター西側に広がる台地上で、東側の城ヶ崎遺跡と隣り合って位置しています。表面採集により、縄文時代中期の土器片や弥生時代の末から古墳時代前期にわたる、櫛歯状の整形痕のある土器片、平安時代の須恵器などが採集されています。そして、平成8年2月には、市道拡幅工事に伴う発掘調査が行われ、石器では、旧石器時代の遺物と思われる黒曜石製のフレイクやフォルンフェルスという石で作られたスクレイパーが見つかり、遺構では、中央に炉跡を構え、隅丸方形の古墳時代の住居跡が1か所、そして、それに伴う甑が完形のまま出土しました。

図中⑤は埼玉県との境に存在する原今井遺跡です。霞川の支流は、ほとんどの川が加治丘陵から発して流れ込んでいるのに対し、右岸南方から霞川へ流れ込む数少ない川、矢端川の付近に鞍状に広がる台地上にこの遺跡はあります。おもに縄文時代の遺跡で、縄文時代中期前半と後半、後期前半と後期後半の土器片、そして平安時代の土師器、須恵器などが散布しており、耕作中に出土したという完形の加曾利E式土器も発見されています。また、宅地造成に伴う発掘調査が平成14年10月に行われましたが、この調査では、柱穴

6か所が確認された事にとどまり、遺跡の範囲などについて今後の課題として残されています。

以上が霞川下流右岸の遺跡です。霞川沿いに発達した文化は縄文時代に限らず、弥生時代から古墳時代、奈良、平安時代にいたる多くの人々の生活があったことを物語っています。原始時代の稲作そして畑作においては、地形が最も重要な条件です。水田の条件を整えた霞川河川敷や数m上段に構える広大な畑などは、ここで生活するのに最も恵まれた場所であり、住みやすい条件が整った地域となっていたことでしょう。現在は多くの遺跡が住宅地となっけてしまい、地形をもとに遺跡を見て歩くことはなかなか難しい状況にあります。そこで、簡単な説明のついた文化財地図などを片手に遺跡巡りはいかがでしょうか？今まで思ってもみなかった場所が実は文化の根源だったということ直にふれあい、その場その場での新しい発見を味わえたら幸であると思うところです。(文責・鈴木晴也)



紹介した霞川右岸下流部の遺跡

- | | | |
|---------|---------|-----------|
| ①K-30遺跡 | ②K-31遺跡 | ③藤橋城城の腰遺跡 |
| ④今井馬場遺跡 | ⑤原今井遺跡 | |